
死ねちゃうスイッチ 2

嶋本圭太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死ねちやうスイッチ2

【Nコード】

N0998X

【作者名】

嶋本圭太郎

【あらすじ】

うふふー、メイちゃんですよー。「続きはない」なんて言っていて、ちゃっかり書いてるじゃないですかー。メイちゃんの壊滅的な魅力に一発K.Oってやつですね？この調子で目指すは書籍化アニメ化映画化ですねーってちょっとまだしゃべってむぐぐ／＼前作の続編ですが、これだけ読んでいただいても大丈夫です。

(1) (前書き)

というわけで、続きになります。

前回よりも少し長くなりましたが、気楽に読んでいただければと思います。

では、ごうぞ。

気がつけば、あたり一面が暗やみに包まれていた。

少年は不安げにあたりを見回す。だが、つい先ほどまで当たり前に存在していたはずの町並みはもはや気配すら感じられなかった。

「怖がらなくていいのよ、ぼうや」

そこへ突然、背後から声がかげられた。少年は心臓が飛び出るほど驚いたが、妖しくも艶のあるその声に引き寄せられるようにして振りかえる。

月明かりに照らされて、ひとりの女性がそこにいた。

黒と白のドレスに身を包み、濃紺の髪はツインテールにまとめられている。白い肌、黒い瞳。そのなかで、唇にひかれた深紅のルージュが、彼女の美しさと妖しさを強調していた。

「う、美しい……」

少年は思わずみとれ、知らず感嘆の声を漏らした。

「美しいお姉さん、あなたは？」

少年の問いかけに、女性は口の端を持ち上げ、微笑を浮かべた。

少年はそれだけで、胸の鼓動が高鳴った。

「私は」

絹のようななめらかな声音が、少年の耳をくすぐっていく。

「私は美しき死神メイ。あなたの魂を連れ去りにきたのよ……」

「って感じの登場が理想なんですよー！。とらちゃん、どうですか？」

「ねえな」

「ひどい！」

メイの妄想話にうんざりした俺が端的に否定すると、メイがベソをかいた。

「そりや確かに今はまだちょーつと子供っぽいかもしれませんけどー、でもでも、わたし成長期だし、きつとあと一、二年経てば通り過ぎる男どもがみんなして振り返るような美女に」

「だからねえって」

「うっうっー……」

二重に否定されて、メイはサヨナラ本塁打を浴びたピッチャーみたいにながくりと肩を落とした。

「だいたい、妖艶な美女っていうならまずこの髪型がだめだろ。ツインテールなんて子供の髪型だろうが」

「あ、いたい、いたい！くちばしで突つつくのはなしですー」

メイが手をばたばたさせたので、俺は彼女の肩から飛び上がった。「ふん。この格好にしたのはおまえだろうが」

翼を飛ばたかせながら、俺はそう言った。

「確かにそうですねー。ほんとーはわたしももつとかわいい動物が良かったんですよ。でも黒基調じゃないとだめって言われて。ぱんだはどうか、って思ったんだけど、大きすぎるのもだめだって言うから、それだとわたし、からすしか思い浮かばなくて……」

「黒猫とかでも良かったんじゃないのか？」

名前をとらなんてつけるんだから、まだしもその方がイメージが近い。

そう言ってやると、メイはこっちを凝視したまま肩をふるふる震わせはじめた。

「あああー！そうですね、それですよ！どうして言ってくれなかったんですかあー！」

「知るか！」俺はそのときその場にいなかったのだから、言えるはずもない。

「あうー。黒猫の使い魔、かわいい……。一生の不覚ですー……」
「おまえ、失礼だな……」

メイはすっかり下を向いてぶつぶつぶやいている。おれは別にかわいいと言ってほしいわけではないが、なんとなく腹がたった。

俺はとら。つい先日、この頭の悪そうな死神の使い魔として生まれた。名前は虎だが、姿はカラスそのものだ。

死者の魂を元にして生み出されたらしい俺だが、生前のことは覚えていない。だがメイが言うには、俺は生きていた頃からこんな感じだった、とのことだった。まあ、もう覚えていないし、別にどうでもいいことだ。

今日は俺が生み出されてからの初仕事。メイが問題なく生者を死に導き、魂を得ることができるようサポートするのが俺の役目らしい。

なんとも、難儀そうな役目だ。こいつ、本当に仕事なんかできるのだろうか？

「えいつ、到着ですよー」

俺たちは一面霧に包まれた場所へと降り立った。

事前に教えられた話によると、ここはメイがターゲットに選んだ人間の夢の中ということらしい。

「他人の夢に入り込むっていうのも変な話だが、あんまり夢っていう実感がないな」

俺はメイの肩の上で、周囲を見回しながらそう感想を述べた。

「わたしたちの世界と夢の世界はそもそも似てますから、実感がないのも当然ですよ。夢を見ているのはターゲットの方だけで、私たちはちゃんと起きてますし」

「なるほど。で、ターゲットはどこだ？」

「ええーっとお……あ、あんなところに」

メイが見つつけて指さした方を見ると、かなり離れたところで膝をかかえてうづくまつている人影があった。

「なんか 暗そうなやつだな」

「とらちゃん、相手は私たちからするとお客様ですから、あんまり失礼な口を利いたらだめですよ？」

「わかってるよ」

「おおー、なんか私いま、かつこよくなかったですかー？……って、いたい、いたい！くちばし禁止！」

突然先輩風を吹かせるメイを俺は容赦なくくちばしで突つついた。

「ううー、やっぱり黒猫がよかったですー。くちばしなし……」
「そしたら爪でひつかいてやるまでだな」

そんなやりとりをしながら、ターゲットへと近づいていく。

十メートルほどのところまで近づいたところで、相手はこちらに気づいたのか、顔を上げた。

まだ子供だ。おそらく中学生くらいだろうか。前髪のがくるくとカールしているが、おしゃれに気を使っているという風にも見えない。ただのくせっ毛だろうか。

顔も身体つきも、これといった特徴はないのだが、全体的にあか抜けないというか、なんだか鈍くさい印象を受ける少年だった。

「あ、どーもー……」メイがにこやかに挨拶をしようとした、その矢先。

少年はやおら立ち上がると、こちらに背を向け脱兎のごとく駆けだした。

「えっ！？あ、あれっ、待ってくださいーい！」

メイも数拍おいてから少年を追ってあわてて駆け出す。が。

「うわ、おまえ足おっそいな！」

少年も走りかたからしてとても早く走っているようには見えないのだが、メイは少年と全く差を詰めることができなかった。むしろ徐々にその背が遠ざかっている。

「ううーっ、わたしは頭脳派なんですようー！」

「どこがだー！」

そうこう言っているうちに、メイは早くも顎があがり始めた。

「こ、こうなったらあ、とらちゃん、初仕事ですー！」

あっというまにふらふらになったメイが叫ぶ。

「あ、あの少年を追いかけて、捕まえてくださいー！」

「やれやれ、仕方ないな」

俺はメイの肩から飛び立つと、数回翼を羽ばたかせた。

それだけで、遠ざかりかけた少年の背中が、すぐに近づいてくる。どうやら、相手ももう限界のようだった。

「おいぼうず、ちよっと待て！」

声をかけながら少年の正面に回り込み、翼を大きく広げて制止した。

「ひええっ！」

少年は情けない悲鳴を上げると、しりもちをついた。どころか、ひっくり返ってしまった。

「そんなに驚かなくてもいいだろ」

俺は着地すると少年の顔のそばまで寄って行ってそう声をかけたが、少年はさらに驚いて這いずりながら後ずさった。

「か、カラスがしゃべってるう！」

「あー、まあ、確かにそうだな」

それは否定のしようがない事実だ。だがそこまで驚かなくてもいいと思うのだが。

俺は怖がる必要はない、と言おうと思ったのだが、俺が少しでも近づくと少年の方は近づいただけずりずりと後退する。

「なんだか、ひどく腹が立つぞ。」

「ひい、ひい、はあ、はあ、と、とらちゃん、ありがとうございますー・・・ふう、ふう」

そこへ、メイがよろめきながら追いついてきた。全力で走った距離はせいぜい百メートルほどだと思うが、メイはまるでマラソンを完走した後かというほどにふらふらで、今にもその場に倒れこみそうだった。

「おまえ、少しは運動した方がいいぞ」

「ふう、ふう、へえ、へえ」

俺の言葉にも、まともに返答ができていない。

少年の方はメイほどに困憊しているということはなかったが、俺

とメイに挟まれておろおろとしていた。

「あー、お水ほしい……」

「仕事終わったらな。で、どうする？俺が用件伝えるか？」

「うう、だいじょうぶです、わたしが言いますー……」

一向に回復しないメイを見かねて言っただが、メイはひざに手をつきながらも俺の申し出を断った。妙なところで律儀な女ではある。

少年の方は事態が把握できておらず、さっきから俺とメイを交互に見回している。動作がいちいち大きく、挙動不審な印象を受けた。「はあ、ふう……なんとか落ち着きました」

メイはやつとのことと身体を起こして大きく息をつくと、てくてこと俺のそばまでやって来た。回復したようなので、俺も飛び上がってメイの左肩に乗る。

俺とメイがひとつの視界にはいるようになって、せわしなく動いていた少年の首も動きを止めた。先ほどとは違い、逃げ出す気配はないようだ。

「こほん」

メイはひとつ咳払い。それからおもむろに右手を指をそろえて顔の前につきだした。

「ちよりーっす」

「……」

「……」

「……」

霧に囲まれたこの世界を重苦しい沈黙が支配した。

「なあ、それ、やっぱやらなくていいんじゃないか……」

「ううっ、確かにわたしも最近、あまりにも受けないのでさすがにどうかなー、と思わなくもないんですけど、でもマニュアルにはかならずやれっつー」

俺の言葉に、メイは半泣きで訴えた。

確かに、俺も先日目を通した「絶対必読！死神接客マニュアル」

という冊子　そもそもタイトルがうさん臭いのだが　によれば、
「第一印象が肝心！」という項目の中に、

死神という職種は、お客様の御命を頂戴するということから、
お客様からはネガティブな印象を持たれがちです。

ですから、最初はおえてくれただけ挨拶をし、お客様の
不信感を取り除きましょう。

そこから生まれるスムーズなコミュニケーションが、
お客様へ確かなCS（カスタマー・サティスファクション）
を提供することへとつながるのです。

などという文章とともに、一例としてまさにメイがいましたのと
同じポーズがイラストで紹介されていた。

「まあ　あれな。書いてあること自体は間違っではないと思う
が……」

例として紹介するのがこれっていうのは、果たしてどうなんだろ
うか。そのまま実行するこいつもこいつだが。

少年はぼかんと口をあけてこちらを見ている。どう考えてもここ
からスムーズなコミュニケーションなんて生まれなだろう。

「もういいから、次いけ。次」

重い空気に耐えられなくなった俺が促すと、メイは消沈した様子
で突きだしていた手を引っ込めた。それから気を取り直して、相変
わらずしりもちをついたままの少年に声をかけなおした。

「えっと、こんばんはー。わたし、死神のメイって言います。メイ
ちゃんって呼んでください。この子は使い魔のトラちゃんです。か
らすですけど、トラちゃんです」

余計なことまで言わないと気がすまないのか、こいつは。

だがここでツッコむとまた話が進まなくなるので、俺はぐっと我
慢した。

少年はと言えば先ほどまでのオーバーリアクションが一転、口を

あけたまま無言でこちらを見つめている。

メイはスカートのポケットを探ると、一枚の紙をとりだした。

「本人確認しますねー。お名前は武市雄一様、十四歳中学二年生、お母さんとのふたり暮らし。間違いないですか？」

「……」

「……」

「……」

「……あのー？」

少年 雄一は無反応を続けている。さしものメイも困ったような表情になった。

「寝てるんじゃないのか？」

「でも、目は開いていますし、そもそも、自分の夢の中でまた寝ちゃうなんて器用すぎますよっ」

俺たちが小声でそんなことを話し合っていると、雄一の首がかくんと折れた。

「……りだ」

影に隠れた口元からかすかに言葉が漏れ聞こえる。

「おいぼうず、どうした？」

「あんまりだ」

俺がかけた声をかき消すように、雄一の声が大きくなった。

「いままで一度だっていいことなかったのに、もう殺されるっていうの？そんなの、あんまりだよ！」

雄一は堰を切ったように大声を上げながら起きあがる。こっちに向かってくるかと思っただが、少年はそのままひざをつくと、泣き出してしまった。

「うっ、ひどいよ、死神なんて、ぼく、もう死んじゃうんだ。う

うっ、うっーっ」

「なんか、異様にものわかりのいいガキだな」それはありがたいが、これでは話が進まない。

「がきなんて言ったらだめですよー。それに、ちょっと誤解があ

りますねえ」

突然声を上げて泣きじゃくられても動じず、メイはかがみこんで目線の高さを雄一に合わせる。このあたり、それなりに場数は踏んでいるということか。

「えっと、確かにわたしは死神ですけど、死にたくないひとを強引に殺しちゃったりはしないので、安心してくださいー」

「ひつく 本当に？」

「はいー。わたしのお仕事は、死にたいひとを出来るだけやすらかに死なせてあげるようにすることなんですよー」

雄一が涙を拭いながらたずね、メイがそれに笑顔で答える。ようやくまともな会話になってくれそうだ。俺はばれないようにそっと詰めていた息を吐いた。

「で、そこでこれです」

メイは少年に笑顔を向けたまま、スカートのポケットをぐそぐそとやりだした。

「じゃっじゃーん」

「あの……なんですか、これ？」

間の抜けた効果音とともにポケットから取り出された手のひらサイズの物体を見て、雄一が怪訝な顔をした。

「やすらかに死ねちゃうスイッチです」

「……え？」

「ですからー、やすらかに死ねちゃうスイッチです」

メイは得意満面で二度そう告げた。雄一の方は涙は引っこんだようだが、代わりにまた口が開いてしまっている。なんだか締まりのないやつだ。

「誰が死ぬんですか？」

「それはもちろん、雄一君ですよー」

もともと間延びした話しかたをするせいで、メイの態度はまるで幼な子に対するそれだった。見た目はどっこいなのだが。

雄一の方はいまいち理解が追いつかないようで、メイの顔と目の

前に突き出されたスイッチをしばらく交互に見比べていたが、やがて飛び上がるようにしてまたメイから三メートルほど離れた。

「な、なんてものを見せるんですかぁ！」

せつかく泣きやんだと思ったら、すぐまた泣きそうな顔になっている。

「安心させておいて、結局僕を殺す気なんじゃないですか！」

「ええっ、違いますようー。わたしが殺すんじゃないくて、雄一君が自分で押すんです。そうすると、痛みも苦しみもなく、こうすーつと死ねてしまうというスイッチなんです。すごいでしょ？」

「なんでそんなスイッチ、わざわざ自分で押さなきゃならないんですか！」

「えー、押したくないですかー？おかしいなあ……」

雄一がゴネたのが予想外だったのか、メイは表情をしぶくしたが

……。

まあ普通、ゴネるわな。

「うーん、誰もが待ち望んだ画期的アイテムきたーっ、って思ったのにー、どうして押したがないのかな？」

俺はメイの頭を痛くない程度に突っついてこちらを向かせる。

「いきなりそんなもん見せられたら普通は誰だって引くわ。ちゃんと説明してやれよ」

「それって、遠回しにわたしはふっーじゃないって言ってます？」

「むしろストレートに言ってるつもりだが」

「うっつ、とらちゃんにはやさしさが必要ですよー」

メイは半泣きの顔をしながらも、雄一に向き直った。

「えっとですねー、べつにわたしたちはてきとーに雄一君を選んで夢の中にお邪魔したわけじゃないんですー。ちゃんと理由があるんですよー」

「理由って？」

「雄一君、いま学校でいじめにあってますよね？」

雄一ははつと顔を上げ、メイの顔をまじまじと見つめた。メイは愛想笑いを引っ込め、真剣な表情で見つめかえしている。

「ややあつて、雄一はうなずいた。」

「うん」

「結構、きびしくなってきたんじゃないですか？」

「うん。去年くらいまでは無視されたり、教科書を隠されるくらいで済んでいたんだけど、今年に入ってからだんだんひどくなって、体操服をカッターか何かでびりびりに破かれたり、トイレに連れ込まれて便器に顔を突っこまされたり。直接殴られたり、お金をせびられたりしたことはまだないけど、先生も見ても振りだから、いつかされるのかもしれない」

雄一はまくしたてるように言った。教師が役に立たない上、親は母親のみで、パートを掛け持ちして毎日忙しく働いている。これ以

上心配や苦勞をかけたくないと思っているのだろう、こいつは誰にも相談できていないのだ。

「もしかして、僕はあいつらに殺されるの？それで、そんなことになる前に、スイッチを押して死んでしまえってこと？」

雄一がそう言ったので、俺は少し感心した。おもったより頭の回転は速いようだ。ただし、正解というわけではない。

「あ、そこまではいけませんよー。確かにいじめっこものやることはこのさきどんどんエスカレートしていきますけど、殺されるところまではいけません。雄一君の心構え次第で、耐えきることも十分可能ですー」

「じゃあ、どういう……」

「ただ、そのさき高校へ行っても、雄一君はやっぱいじめられますー。もちろん、中学のいじめっこと別のところに行っても、ですよ。大学へ行ってもはぶられておトイレでご飯を食べることになりますし、就職してもパワハラされるし、電車で痴漢に間違われる確率もすごく高いんですよー」

「要は、おまえの対人運って最悪なんだよ」

具体的すぎて逆に要領を得にくいメイの言葉を、俺がまとめてやる。

「おまえの問題だから、環境を変えても改善しない。運勢のことだから、努力のしようもない。おまえがこの先どれだけががんばって生きていても、この方面でいい思いをすることはまずないな。とりあえず、一生童貞で終わることは間違いない」

「とらちゃんはちよつと下品ですー」

ほんのすこし頬を赤くしたメイが、また後を引き継ぐ。

「というわけで、雄一君はこれから生きていく限り、いやな目にはつきり遭うんです。死神として、わたしが保証します！」

メイはどんと胸を叩いた。そこで威張ってどうする。

「そんな……」

幸いにも、雄一はショックで下を向いてしまっていて、的外れな

メイの態度には目がいつていなかった。

「で、そこで改めて、これです」

メイはまたポケットを探ると、一度しまいこんだスイッチをまた取り出した。

「じゃーん」

また効果音付きで。

「このスイッチを使えば、最低の人生もすべてないことに出来るんですー。しかも痛くも苦しくもないので、自力で死ぬよりお得ですよー」

メイはこのスイッチの機能を相当気に入っているのか、自然と笑顔になり、声も明るさを増した。

また眼前にスイッチを突きつけられた雄一は、だいぶ押されている様子だった。おっ、もうひと息かな？

「僕　まだ、死にたくないです……」

か細い声で雄一がそう言った。

「でもでも、いいことひとつもないんですよ？」

「ひとつもなんて、そんなことわかんないじゃないですか！」

雄一は訴えたが、残念ながら俺もメイもうそは言っていない。少なくとも、他人が関わることでこいつがいい目を見る可能性はつきり言つてゼロだ。

対人運をのぞけば別に普通なので、逆に言うと他人が関わらないことならこいつが幸運を拾ったり成功を収める可能性はなくてもないんだが……このご時世に、他人とのコミュニケーションゼロでやっていけることがどれほどあるのだろうか。

「ぼつず、残念だが……」

「すこしでもいいので、なんとか運勢をよくしてもらおうわけにはいきませんか？」

「そうしてあげたいのはやまやまですけどー、わたし死神なんで、出来ることはすこしでもやすらかに死んでもらって、魂を清らかにしてあげることくらいなんですよー。生きている間のことは管轄

外なんです、ごめんなさい」

メイはそう言って頭を下げたが、相手は下を向いてしまう。メイがまたあわてて明るい声で付け加えた。

「あつ、でも、今死ぬとですね、未成年のうえ犯罪も犯してないきれいな魂になるので、天国行きは間違いないですよ？多分、転生までの期間もおまけしてもらえるんじゃないかなー、きっと。ラッキ―ですねー」

正確には俺たちの仕事は死んで魂になったやつを死後の世界につれていくところまでで、そこからさき魂がどういう扱いをされるか決める権限はない。なので今の言葉の確証はまったくないのだが、まあおそらくはメイの言うとおりになるはずなので、俺は黙っていた。

「このまま生きていくと、魂はだんだんとすり減って汚れていくし、そのうえもし我慢しきれずに自分が犯罪を犯したりすると、どんなにかわいそうな境遇でも地獄行きは免れません。今のうちに死んでおいたほうが、将来のためだと思うんですよ」

メイの言葉は間違っていないのだが、もう少しまい言いはできないものだろうか。

雄一は下を向いたまま考えこんでいるようだった。これまでの人生を振り返り、そこからこのさきの人生を想像しているのだろうか。やがて顔を上げた雄一少年は、それまで見せていた気弱げでいかにもいじめられていそうな情けない表情から少し変化していた。

「やつぱり、僕は死にたくない　いえ、まだ死ねません」

目の奥に、はつきりとした光が宿っている。

「ええっ、どうしてですかー？」

メイのほうは相手の変化に気がついていいのか、いつもと変わらぬ調子でそう聞いた。

「確かに、あなたたちの言うとおりの人生なんていやですけどだからってここであっさり死んでしまったら、母さんに申し訳が立たない」

「あ お母さん……」

メイがなにか言いかけ、やめた。

「母さんは、親父が五年前に死んでからずっと、ひとりで僕を育ててくれているんです。パートはいくつも掛け持ちして、でもちゃんと毎日僕の弁当も作ってくれて。 。 本当は親父の生命保険を使えばもっと楽に生活できるのに、僕が大学まで通えるように、って、ほとんど手をつけずに残してるんです」

力強く語る雄一の言葉を、メイはやや目を逸らしがちにして聞いている。いつも真つ正面から相手の目を見てはなすこいつにしては珍しい。

「僕が死んでしまったら、母さんの五年間の苦労は無駄になってしまふ。それに、そうしたら母さんはひとりぼっちになってしまう。

そんなこと、僕にはできません」

「うっー、どうしてもダメですか？ いいことないんですよー？」

「はい。それにカラスさんは対人運が最悪って言いましたけど、僕には母さんがいます。たとえ他の人から嫌われたとしても、母さんがいれば大丈夫です。耐えて見せますよ」

そう言つと、雄一は初めて笑みを見せた。つらい人生を生き抜く覚悟ができたのか、晴れがましく見える笑顔だった。

だが こいつの運勢の最悪っぷりは生半可なものではないのだ。

「メイ、言わなくていいのかよ」

伝えるべきことはまだある。俺はメイを促したが、メイは口をとがらせてそっぽを向いてしまった。

「おいこら、どうした」

「うっー……」

メイは言いしづつている。なんでも気にせず口に出せる娘だと思っていたのだが。

俺が言ってもいいのだが、一応俺たちの関係はメイが主、俺は使えない魔にすぎない。メイが言わないことを俺が言うのはさすがにはばかられた。

「決心、変わりませんか？」

「はい。僕は自殺もしないし、もちろん犯罪を犯すつもりもありません。母さんの苦勞に報いることができるよう、精一杯生きていくつもりです」

雄一のほうは、すっかり心を決めてしまったようだ。出会った当初とは別人のようにしつかりとした口調でそう答えた。

「メイ、いいのか？」

俺が聞くと、メイはため息のように大きく息を吐いた。

「ほうー。仕方ないですー。今日のところは退散しますー」

「ごめんなさい。僕のために来てくれたのに」

「いいええー、お気になさらずにー」

憑き物が落ちたかのような表情の雄一に対し、メイの笑顔は少々疲れを感じさせた。

すこしずつ霧が晴れていく。この夢が終わろうとしているのだ。

「ではまたー」

メイの簡単な挨拶とともに、互いの姿はぼやけ、視界が暗闇に落ちた。

俺たちは雄一の夢から抜け、自分たちの世界へと戻ってきた。

生者の世界と死者の世界の狭間　そんな曖昧な世界だが、意外と住民は少なくない。

俺たちのように生者の魂を死者の世界へと導くものもいれば、また逆に新たに生まれる魂を生者の世界に送り出すものもいる。仕事は結構多いのだ。

生者の世界のように広大ではないが、俺たちの世界もまた、ひとつの街なのである。

そこそこ賑わう中央通りを抜け、裏路地にはいる。空腹に訴えかける匂いを容赦なく振りまいているホットドック屋を素通りし、さらに細い路地に入ると薄汚れた雑居ビルが見えてくる。その三階が俺たちの所属する事務所だった。

「あつうー……説得失敗ですー」

事務所の扉を開け、自分の席に座るなりメイが肩を落とした。俺はそんなメイの肩から、部屋のすみに設置された止まり木へと飛び移る。

事務所の中には仕事用の机が四つ並べておかれ、さらにその奥にもうひとつ机がある。が、今は俺たち以外には誰もいなかった。俺たちの仕事はノルマ制で、出勤日も時間も決められてはいない。仕事のあるやつだけが来るようになっていいるから、珍しいことでもない。

時間は生者の世界とリンクするようになっており、今は朝方だ。どついう原理かこの世界でも太陽は昇るが、この事務所の窓は西向きになっていて朝日はほとんど入ってこない。

メイは自分のデスクのライトスタンドの電源を入れて手元を明るくすると、仕事用のパソコンを立ち上げた。

「どうするんだ、これから」

「できれば、明日もう一度説得したいんですけどー……」

「あの様子だときびしいんじゃないのか？ありや生きる意思をはっきり固めちまってるぞ」

「ですよー。わたしの言葉巧みな営業トークをかわしきるなんて、たかが中学生と思って少々甘く見てしまいましたですよー」

「というか、おまえが中途半端な説得をするからだろうが」

「あれ、わたしのせいですか？」

「ほかに誰のせいだって言うんだ」

「とらちゃんの……」

「つつくぞ」

「暴力反対ですよー」

答えながら、メイはパソコンを操作している。画面には何色にもわかれた棒グラフや波形グラフ、さらに数値データなどが映し出されていた。

メイが言うには、これは「お客さんの運命をチェックしたり、ち

よこつといじくつたりできちゃうすごいソフト」なんだそうだ。さすがにこれ进行操作できるのは死神だけで、使い魔である俺には見えてもなにがなんだかわからない。

「だいたい、どうしてあるとき」

「あつ、ちよつと待ってください」

メイは俺の言葉をさえぎると、しばらく無言になってキーボードを叩いたり、画面の数字を確認していたりしたが、やがて画面から目を離れた。

「うーん、やっぱりダメですねー」

「どうした？」

俺はまたメイの肩に乗ると、画面をのぞきこむ。が、やはりなにがどうなっているのかはわからない。

「あ、とらちゃんはこのつちで見たほうがいいですよ」

メイがなにやら操作すると、グラフや数字が消え画面いっぱい動画が映し出される。

すこし暗い画面の中には、先ほど夢の中で会話をした武市雄一が映っている。ターゲットの生者の世界での行動をチェックできる画面なのだ。

雄一はちよつと起きたところらしく、ベッドに腰掛けて眠そうにまぶたをこすっている。すぐに立ち上がりずぼんやりしているのは、夢の中での俺たちとの出会いを思い返しているのだろうか。

今のところ、画面の中に異変は認められない。

「残念ながら、もう限界だったみたいですよー」

だがその言葉で、なにが「ダメ」だったのか、俺にはわかってしまったのだった。

「変な夢だったなあ……」

眠気を追い払ってベッドから腰を上げた雄一は、さきほどまで見えていた夢の様子を思い返しながら洗面所へと向かった。

普段見た夢は、誰かに話したくなるような突飛なものであっても、

少し時間がたてばあつという間に細部がぼやけ、思い出せなくなつていってしまうものだ。だが、あの夢の会話内容はいまでもはつきり思い出せるし、あの眠そうな目をした黒と白のドレスの少女も、その肩に乗っていた人の言葉をしゃべるカラスも、その容貌をはつきりと思い出すことができるのだ。

それだけでも十分おかしな夢といえるが、夢の内容もだいぶ変だった。なにしろ、いきなり女の子に「押したら死ぬスイッチ」を突きつけられるのだから。

だが、あの夢を見たおかげで、救われた部分もある。

事実、ここのところ雄一へのいじめは激化の一途をたどり、いっそ死んでしまつたほうが楽なのでは、と思うこともあつたのだ。

しかし、いざ目の前に「死ぬ」という選択肢をつきつけられて考えれば、そんな簡単な手段をとることはできないのだと、雄一は自分の力で気づくことができたのだつた。

一生童貞だとか、ひどいことも言われた気がするが、そういう意味ではいい夢だつたと思う。

トイレで用を足し、洗面所で顔を洗いながら、雄一はそんなことを考えていた。

2DKとはいえ狭い公営団地だが、家の中は静まりかえっている。雄一はダイニングキッチンへとでると、冷蔵庫に張り付けられた母のパートのシフト表を確認した。それによると、昨日はコンビの夜勤シフトだつた。今日はまた昼から、近所の弁当屋のパートが入っている。

それなら、もう帰ってきているはずだ。気配がない、ということはおもう母は自分の部屋で寝ているのだろうか。

だが、普段ならどんなに忙しいときでも雄一の朝食と弁当の用意だけはしてあるのに、今日に限ってダイニングのテーブルの上にはなにも置かれていない。

雄一は母親の苦勞を良くわかつているから、一日くらい弁当がなくなつて文句を言うつもりはなかったが、さっきからこの家にいる

はずの母の気配をまったく感じないこともあって、ちいさな不安が胸によぎった。

雄一は母の部屋へ向かった。疲れて眠ってしまったているだけならいい。その様子を確認すれば、このかすかな胸の締め付けも霧散するだろう。

母の部屋は畳敷きの和室になっている。入り口のふすまはしっかりと閉じられていた。

小学生の頃はなんの躊躇もなく全開にしていたふすまを、遠慮がちに少し開く。

この部屋には父の遺影がおかれている。いつものように線香の匂いがした。

畳の上に、母の足が投げ出されている。やはり、眠ってしまったているのか。だが布団も敷いていないし、寝るなら寝るで、ちゃんとしたほうがいい。

「母さん 入るよ？」

成長期を迎え日に日に大きくなる自分の身体が通れるように、ふすまを大きく開いた雄一は眼前の光景に目を見開いた。

足を投げ出した母は、着替えもすませていない。だらしくうつ伏せになっており、上半身を父の遺影をおく仏壇代わりの小さなテーブルの上に突っ伏していた。伸ばされた右手がその父の遺影をつかみ、引き倒している。

眠っているのではない。倒れているのだ。

「母さん！」

雄一があわてて部屋に入り、母を抱き起こす。

「母さん！」

もう一度叫ぶが、返事はない。

母は、息をしていなかった。

「母さんっ！」

雄一がどれだけ声を張り上げたところで、言葉を返すものはない。父のために灯された一本の線香が、煙をゆらゆらとくゆらせるばかり。

りであった。

その後、雄一の母親は救急車で運ばれたが、結局一度も目を覚ますことのないまま、その日のうちに亡くなった。

母親の魂はメイが回収した。魂を回収するのが死神の本分であり、もっとも喜ばしい瞬間　そう聞かされていたのだが、メイは特に喜ぶわけでもなく、淡々と業務をこなしていた。

「うれしくないのか？俺と組んでから最初の魂回収だろ」

「あ、そういえばそうですねー。えへへ、やりましたねー、ぱちぱち」

俺の言葉にメイはそう答えたが、字面ほどうれしそうな声には聞こえなかった。むしろ少し無理をしているようだ。

「なにか問題があるのか？」

「この魂にはなんの問題もないですけどー……」

メイは下を向いてすこし言いくそうにしている。

「なんだよ」

「雄一君がかわいそうだなーって……」

うながすと、独り言のようにそっぽつりと言った。

「まあ、たしかにな」

俺たちと夢の中で会話をして、育ててくれた母のために強く生きる、と決心した、その矢先の母親の死だ。タイミングとしては最悪だろう。

「だから、あのとき教えてやったらよかったじゃねえか」

雄一の母親の死因は、いわゆる過労死だ。五年前に夫を亡くして以来、一人息子に不自由な思いはさせたくない一心で昼も夜も間わず働き、家事もこなしてきた。その結果、身体はもはや限界を迎えていたのだ。

遅かれ早かれこうなることは、俺たちにはすでにわかっていたことなのだった。

だが、あのときメイは雄一にその事実を伝えなかった。

「あそこで母親がもう死ぬってことを伝えてやれば、あの場でさっさとスイッチを押していたかもしれないんじゃないか？」

「だってー、かわいそうじゃないですかー……」

メイの返事は歯切れが悪い。

「ただでさえいいことなかったのに、大好きなお母さんまでもうすぐ死んじゃう、なんて知ったら、自分を悲観しすぎて悪霊になっちゃうかもしれないかったですし」

「言い方次第だと思うけどな」

「とにかく、あのときは言いたくなかったんですようー」

メイはわざとらしくすねてみせると、そっぽを向いた。これ以上この件について追求されたくはないようだ。

俺がメイについて知っていることはまだそう多くはない。バカだつていうのはまあ間違いないが、バカなりに考えていることはあるんだろう。

ひょっとしたら、母親っていうのは彼女にとって大きな意味を持つキーワードなのかもしれない。

それがどういう意味なのかは今わからない。とにかく、今わかるのはこいつがまだ成長しきっていないターゲットに母親の死を伝えたくなかったのだということだけだ。

「もう少しもつかないかな、と思ったんですけどねー」

「母親か？」

「はいー。あとー、二回は説得できると思ってたんですようー。でもお母さんが予想以上にひどくて、私の力じゃどうにもなりませんでした」

メイが使うことのできる力は、あのパソコンのソフトを操作して対象やその周囲の運命を少しだけ操作できるというものだが、説明を聞いても俺には良くわからない。たとえば今日起きるかもしれないことを明日起こすようにしたり、今日はお会わないはずの人に出会ったり、そういうことができるらしい。だが、運命の流れは複

雑に入り組んでいるので、百発百中というわけでもないらしい。

要は、できることは限られているということだ。雄一の母親の病気を治してやったり、雄一の運勢を良くしてやったりなんてことはできない。

できることとできないことを理解し、正しく使わなければ役に立たない、そんな力なのだ。

今回、メイは雄一の母親の寿命を、彼女の力を使ってできるだけ長引くように調整しようとしていた。

だが、結果的にその試みは失敗してしまったのだった。

「まあ、こうなっちまったもんは仕方ないよな」

俺は翼を広げ、その先でメイの頭を軽く撫でるようにたたいた。

「あと俺たちにできることは、あの坊主にもういちど会って、今度こそ安らかに死ねるようにしてやるだけだ、そうだろ？」

「そうですねー、お母さんが死んじゃった以上、この世に未練もないでしょうからー」

メイはこつちを向くと、笑顔になった。いつもの脳天気な笑顔からするとまだすこし元気がないようだったが、仕事が終わればすぐもとに戻るだろう。

最愛の母を亡くし、消沈していた雄一の様子から、俺はこの仕事はもうじき終わるだろうと高を括っていたのだが、その見通しは少々甘すぎたようだった。

葬儀に関することは病院の連絡で駆けつけた親族たちがほとんどを片づけた。雄一は周りに気遣われながらも、どことなくのけ者にされているような風にも見えた。

無理もない。雄一のいないところでは、いったい誰がこの先あの子供の面倒を見なければならぬのか、親族の間で責任のなすりつけあいが増え広がられていたのだから。

その様子をメイのパソコン越しに見て、あいつの対人運の悪さは本物だと実感した。あいつのことを理解してやれる人間は、きつと

もう現れないのだろう。

だからこそ、俺もメイももう一度あいつに会って、あのスイッチを押すように言ってやりたいのだが。

困ったことに、雄一はあれから一睡もしないのである。

ときおりまどろむようにしていることはあるが、時間は短く、はつきりと夢を見るところまでいかない。

俺たちが直接ターゲットと会話ができるのは、夢の中だけなのだ。雄一の母親が亡くなってから三日。雄一は自宅に戻ってきていたが、食事もろくにとらず、夜は母親の部屋で、父と母の遺影を眺めながら過ごしていた。

「あー、まずいですよー」

パソコンを操作しながら、メイがあわてている。

「雄一君の運命が、どんどんまずい方向に流れていっちゃいますー。このままだと、ちょっといろいろよくない方向に進むおそれがー」

「よくない方向って、どうなるんだ？」

「えっとですね、最悪のパターンですと、路上で刃物を抜いて無差別殺人事件とかです」

「ほんとに最悪じゃねーか……」

「はいー。このままだとらちゃん消滅の危機ですよー」

「あ、なんだと？」

突然自分の名前を出されて驚く。「なんで俺が 消滅？」

「予定にない死者をあんまり大量に出しちゃうと、偉い人に怒られちゃうんですよー。げんぼうとかー、こうかくとかー」

「それがなんで、俺の消滅なんて話になるんだ」

「わたしのばあい、この間やっと使い魔をつけてもらえるようになったところなので……こうかくになれば、使い魔はなしに」

「つまり、そうなると俺は？」「消滅です」

「なんだそりゃ！」俺は叫んだ。「そんな話、聞いてねーぞ！」

「だって、いきなりこんな事態になるなんて思いませんでしたしー」「死神の力でどうにかならないのか？」

とにかく雄一をなんとかすれば、俺の消滅もなしになるはずなのだ。

「やってますけどー、こっちの介入が焼け石に水ってくらいにすごい勢いで悪いほうに流れていってるんですよー」

メイは眉間にしわを寄せ、いつも半開きの眼を気持ち大きく開きながらキーボードをぱちぱちたたいている。

画面をのぞいてみる。グラフや数字がひっきりなしに変化しているものの、やはり意味は分からない。

仕方ないので、画面のすみに表示されている、雄一の様子をモニターしているパネルに目を移した。

雄一は制服に着替え、台所に立っていた。どうやら学校に行く準備をしているようだ。

炊飯器で炊いたご飯を弁当箱に盛り、自分でウインナーと卵を焼いている。しつかりと弁当の用意をしているあたり、メイが焦っているほど追いつめられた様子には見えない。

「落ち着いているように見えるけどな」

「でもでも、こっちのデータはちつともよくならないんですよー」
黙々と弁当作りを続ける雄一。手の込んだものはないが、とにかくご飯とおかずで隙間のなくなった弁当箱にふたをする。

「あーあ、粗熱をとってからにしないとベチャベチャになっちゃうぞ」

「とらちゃん、意外と家庭的ですね……」

当然、俺の助言など聞こえない雄一は自分の学生カバンを持ってくると、台所の上にあるものを詰め始めた。

弁当箱に箸箱。それから鞆付きの果物ナイフ。

「つておい！」

「うわっ、なんですかとらちゃん、びつくりしますよう」

「刃物入れたぞ、刃物！」

どう考えても弁当を食べるのに果物ナイフは必要ない。

「このままじゃ、本当に無差別殺人が起こっちゃうんじゃないのか

「？」

「あー、まずいですよー。そしたらせつかく増えたお給料が減っちゃいますー。ケータイも新しくしたいし、靴とかアクセとか欲しいのがいっぱいあるのにー」

「俺の心配をしるよ！」

そんなやりとりをしている間に、準備を終えた雄一は果物ナイフ入りの学生カバンをひっさげて出て行ってしまった。

「おい、なんとかならねーのかよ」

「うー、はつきり言っただたしの力じゃこの流れはいかんともしがたいというかー……せめて夢を見てくれれば直接説得できるんですけどー」

「眠らせることはできないのか？」

「うーん、雄一君通学は徒歩ですし 授業のお話をつまらなくして、眠くなるようにするとかしか」

「やらないよりましだろ、とにかくやれ」

「はいー」

メイがキーボードをぱちぱちたく。手さばきもどことなくのんびりしているので、端で見ているほかない俺はいらいらするばかりだ。

「やりましたー」

「よし、後はあいつがちよっとでも眠ったらすぐ夢の世界に入れるように、入り口で待機だ」

「でも、通学中にナイフを抜いちやう可能性もありますけどねー」

「……」

俺はメイを突っついた。

「いたい！なんでつつくんですかー？」

「さらりと気をそぐ発言をするな！」

「だって、ほんとのことですよー」

「うるさい、そうならたらそうならだ。いいから、行くぞー！」

(3) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

当初の予定では1回5000字ほどの更新で全4回くらいのつもりだったのですが、お話をまとめるのに予想以上に文字数を使っており、どうも全5回……ひよっとすると全6回くらいになるかもしれないです。

最近、なかなか思った通りの文字数に収まらず四苦八苦しております。表現力が増したおかげで文字数が増えてるのだったらまだいいのですが。

お読みいただいているみなさまは、もうしばらくお付き合いくださいませ。

よろしければ、ぜひ感想などお聞かせください。

事務所を後にした俺たちは、本当に全力で走っているのか疑わしいほど足の遅いメイを俺が叱咤しながら、数日ぶりでそこへやってきた。

イモータル・スペースと呼ばれるそこは、この世界と生者の世界、あるいは死者の世界とを結ぶ場所だ。

死神の中でも上位のものならここを通って直接ほかの世界に行つて干渉することもできるらしい。また、これは噂ではあるが、より上位の存在　天使とか悪魔とかいわれるものたち　ならば、過去や未来に行くことも可能だと言われている。

だが、メイのような下級の死神にはそれは縁遠い話で、俺たちが行くことができるのは生者の夢の中だけである。

俺たちが通行することを許されているごく限られた範囲を通つて、ターゲットの夢の中へはいるための小さなブースへとたどり着く。

「ぜえー、ぜえー……」

「おい、息を切らすのは後にして、座標をセットしろよ」

いくつもならば小部屋の一室に入ったとたん、メイはその場にくずおれそうになる。だが、室内の機器は細かいので俺には操作できない。

三畳ほどの広さの小部屋にはモニターといくつかの操作機器、そして俺たちが入ってきたのは反対側にもうひとつ扉がついている。あの扉の向こうが夢の世界だ。

ただし、そのまま扉を開いても誰の夢の世界にとばされるのかわからない（というか、その状態では危ないので扉が開かない）。そこで機器を操作し、個人個人で固有の座標をセットすることで、ねらったターゲットの夢の世界に入れるようになるのだ。

さらに、座標をセットすれば、モニターの方にメイのパソコンでみたのと同じ、ターゲットの生者の世界での様子も映るようになる。

俺たちが事務所からここへ駆けてくるあいだ、十五分ほどの時間が経過している。雄一はもう学校へ着いている頃合いだ。何事も起きていなければ、だが。

メイがひーひー言いながら座標をセットすると、映し出されたのは教室の様子だった。

雄一は窓際の席に座っている。とりあえずまだ騒ぎは起きていないようだ。おれはほっと息をついた。

「どうやら通学時は問題なかったようだな」

「そうですかー、それはなにによげほっ、げほっ」

メイは室内に設置されたふたり掛けのソファに倒れこむようにしていて、モニターをまったく見ていなかった。まあ息を整えるくらの余裕はあるだろう。

メイのことは放っておいて、おれはまたモニターに目をやった。

雄一は自分の席でただおとなしく座っている。教室内にはすでに多くの生徒が登校してきていたが、誰も雄一には話しかけない。たまにちらりと目をやるものはいるが、それ以上のことはなかった。

これは母親を亡くした雄一を気遣っているからなどではない。雄一はずっと以前から、この扱いを受け続けているのだ。

ホームルームが始まる前の教室内は、クラスメイトがいくつも輪を作り、世間話に興じている。雄一のことを気にしなければ、その光景に何の違和感もない。

だが、雄一を中心にして見れば、それは異質な光景といえた。

昨日見たテレビの話、いま遊んでいるゲームの話、スポーツの話、アイドルの話……そんな他愛もない会話を楽しむ無邪気な中学生たちが、ただひとりの人間だけは意識して意識しないようにしているのだから。

メイの使い魔として生まれる以前の記憶を持たない俺には、雄一にも、まわりのクラスメイトたちにも感情移入することができない。だがその分、この光景の異様さははっきりと感ずることができた。

「あれっ、なんだよ、武市がいるじゃねえか」

そろそろ予鈴が鳴るといふ頃になって教室に入ってきた男が、雄一をちらりと見やったあと教室に響く声でそう言った。

誰にもなく、という感じではあるが、声の大きさからして独り言ではない。

一メートル八十越えの背丈で、中学生とは思えないがたいの良さを持つそいつは、このところ雄一へのいじめをエスカレートさせている中心人物だった。

この体格だと、教師といえどもおいそれと注意できないのだろう、制服はどう見ても校則違反といえるレベルで着崩している。

そいつの言葉に応えるものはいなかったが、あちこちで無秩序にかわされていた会話も一瞬にして途絶え、教室はにわかにしんとなった。

「おまえ、死んだんじゃなかったのかあ？」

「テツさん、それはこいつの母親だよ」

今度の言葉は、雄一に向けられたものだったが、答えたのは一緒に入ってきたひよるながい男だった。同級生なのにさん付けで呼ぶあたり、典型的な腰巾着といったところだ。

「なんだ、もうこいつの辛気くさい顔を見なくてすむと思ったのによ」

いじめ野郎は、そう言いながら雄一へと近づいていく。

「いっそ、おまえも死んじまったらどうだ？あ？」

雄一の机の前に立ったそいつは、挑発的な笑みを浮かべながら雄一を見下ろした。

雄一はなにも答えない。これまでからまれたときは、いつもそうやってかわしてきていた。

だが、今日は少し違った。雄一は無言のまま、にらむような目つきでそいつを見上げたのだ。

「なんだ、やんのか、ああ？」

その視線が癪にさわったのだらう。そいつは一転、目つきを鋭くして雄一にすごんだ。が、雄一は眼をそらさない。

これは　　まずいぞ。

「おい、メイ、やばいぞ、おい！」

俺はあわててかたわらのメイを呼んだが　　。

「ふみやあ、ぐーぐー」

「おまえが寝てんじやねーっ！」

「あだっ、だっ、つむじは反則ですよー！」

ソファに倒れこんだまま眠りこけていたメイを、俺は容赦なくつついて起こした。

「ううー、背が伸びなくなっちゃいますよう」

「それ迷信だろ。そんなことより、こつちを見る」

つつかれたあたりをさすりながら身を起こしたメイだったが、モニターを見るとさすがに顔色を変えた。

「い、一触即発じゃないですかー」

「なんとかしろ！」

「そんなこと言っただつてー、ここからじゃ眠ってない人にはどうしようもないですよー」

「見てるしかないってのか？」

いつそ殴りあい程度で済んでくれればいいが　　。俺は血の気の引く思いでモニターを見つめた。

そのとき、予鈴が鳴った。

無機質に響きわたるその音で張りつめていた糸がゆるみ、固唾をのんで見守っていた周りのクラスメイトも思いだしたように移動し、各々の席に着きはじめる。

「ちっ」

いじめ野郎も興をそがれたのか、自分から視線をはずすと自分の席へとむかっていった。

「はうー」「ふーっ」

その様子をモニター越しに見ていた俺たちは、同時に溜めていた息を吐き出した。

「あ、危なかつたですねー」

「できること少なすぎるな、俺たち……」

「そこがしたつぱの辛いところですよー」

とにかく、当面の危機は去った。あとは授業中に、ちょっとでもいいから眠ってくれることを願うしかない。

その日の時間割は俺たちの味方だった。昼までの四時限は数学、古文、化学、日本史である。体育もなければ、移動教室もない。ひたすら座学である。

「この時間割なら、なんにもしなくても爆睡確定ですよー」とはメイの弁である。

世の中にはどんなに授業がつまらなくてもきっちりノートを取って最低限の予習復習だけで一夜漬けもせずにテストで好成绩をあげる、そんなやつだっているのだが、こいつには思いもよらないらしい。

が、雄一がそんなタイプだということではない。学校の成績は平々凡々である。ましてこの数日ほとんど眠っていないのだ。授業中に突然刃物を抜いて振り回しはじめる、なんてことにさえならなければ、どこかで限界がくるだろう、とは俺も思っていた。

思っていたのだが。

「おい、もう四時限目が終わっちまうぞ」

昼休み前の最後の関門は日本史だ。

日本史担当の教師は定年が近そうなおっさんだが、とにかく抑揚なくしゃべる男だった。何の工夫もなく教科書を流し読みし、あとは板書。メイの力で話が長く、つまらなくなっているはずではあるが、これはそんな介入がなくても関係ないレベルのひどさだった。

一定の高さとリズムを刻み続けるその語りは、もはやお経か子守歌の領域だ。

教室内の生徒たちは全体の八割ほどがすっかり机に突っ伏して夢の中、ほか一割ほどが水飲み鳥のように首をかくくんかくくん言わせながら耐えしのいでいる状況だった。

が 雄一はしっかりと目を見開いていた。

ここまでの退屈な授業を一睡もすることなく過ごしている。あいつの場合、休み時間でも誰かと会話してリフレッシュするなんてこともできないから、ほかの生徒たちの何倍も強烈な睡魔がおそってきていてもおかしくないはずなのに。

しかし、まじめに授業に取り組んでいるのかといえばそんなこともない。一応、教科書とノートは広げているものの、さっきから一度もペンを握っていないのだ。

視線は基本的に正面を向いている。雄一の席は窓際にあるので、正面すなわち黒板ではない。

「あいつ、授業まったく聞いてないんだな……」

時折窓の外に目をやるような素振りを見せる以外、雄一は動きを見せない。教師たちの眠りにいざなう呪文も、無理に聞こうとしないければその効果は半減するということだろうか。

いや、それよりも、母親の死から三日あまり経って、雄一はほとんどひとことも口をきかず、そして眠らない。こうして座っている姿からは感じさせないが、それだけ異常な精神状態なのだ。

ついにチャイムが鳴り、昼休み前最後の授業も終わりを告げた。

「きりーっ、れーい」

チャイムの音で覚醒したクラス委員の形式的なかけ声がかかり、教師が教室から出ていくと、とたんに教室内に活気が戻ってくる。

「おい、もう昼休みだぞ！」

俺はメイをかえりみた。

「うへへ、給食はカレーとソフト麺」

「……」

「……はっ！寝てないです、寝てないですよ？」

「とりあえずよだれを拭け」

もうツッコむ気力もなくなってきた。

メイはあわてた様子で口元のよだれを袖口で無造作に拭きとるとモニターをのぞきこむ。

「え、もうお昼ですか、本当に？」

「そうだよ。どうすんだ、こいつ全然眠る気配がないぞ」

授業中とは違ってかわって騒がしい教室内では、生徒たちが机をくつつけあってグループを作っている。本来、このグループは座席によって分けられているものなので、雄一が机をつけるべきグループもあるのだが。

雄一は当然机を移動させないし、そのことを指摘するものもない。

このクラスでは、これが普通。明文化されていないルールになっ
てしまっているのだ。

雄一は無表情で、カバンを開き、今朝自分で用意した昼飯を取り出す。

弁当箱。箸箱。そして鞘付きの果物ナイフ。

「だからナイフを出すなよ！」

俺は思わずモニターにツッコんだが、当然雄一の耳には届かない。ナイフは鞘に収められているし、そもそも今は誰も雄一に注目していないので、とりあえず騒ぎにはなっていない。

雄一も机の上に置いたナイフをすぐにどうこうする様子はなく、弁当箱のふたを開いた。

「雄一君はきつとご飯を食べるのにナイフが必要なんですよ、たぶん……」

「どう見たって箸だけで食べる献立だけだな」

メイもさすがに落ち着かないのか、気休めにもならない冗談を言った後はモニターを食い入るように見つめている。

雄一は箸を取り出すと、ナイフは脇に置いたままもそもそと弁当を食べ始めた。

「よしよし、このまま何事もなく終わってくれよ……」

食事をとれば、午後の授業はさらに強烈な睡魔が雄一を襲うだろう。とにかく眠ってさえくれれば、直接説得するチャンスが生まれるのだ。

雄一は弁当を食べることに集中している。

この様子なら、と軽い安堵を覚えたそのとき。

「あれ、おまえ母ちゃん死んだくせに、なんで弁当があるんだよ？」

「うわっ、バカ、絡むな！」

俺はその様子を見て、またモニターに叫んでしまったのだった。

不躰なその声を、雄一は無視していた。

そうしていれば、反応がないことに飽きてやがて絡んでこなくなる。ここしばらくの間、徐々にひどくなるいじめの中で雄一が自分で学んだことだった。

だが今日に限っては、相手もなかなか引き下がらなかった。

「親父に作らせたのかあ？」

「テツさん、こいつ親父ももう死んでるぜ」

前から知っているはずのことを、わざわざ大声で言う。

教室中に響きわたるその声に、抗議するものはもちろんいない。

みな声を潜めて見ているだけだ。

「ってことは、自分で作ったのかよ？」そいつは、大仰に驚いて見せたあと、言った。「どつりでまずそうに見えるわけだな！」

それから自分とふたり、腹を抱えて笑いあう。

笑い声は、ほんのさざ波のようではあるが、ふたりの周りにも伝播した。

雄一の食事の手が止まる。

「見ろよ、コメなんてベチャベチャだし」

「卵焼きじゃなくて、目玉焼きが入ってるぜ。しかも焦げてるし」

ふたりはなおも雄一の弁当を指さしてあげつらっている。

ふたりに同調する笑い声も、少しずつ増えていく。

「ま、こいつの弁当って、母親が生きてたときもまずそうだったけどな！」

「あはは、言ってる！」

違う。

雄一の箸を握る右手に力が入る。

母さんのお弁当は、おいしかった。いつも忙しいから、あんまり手の込んだものはなかったけど、ご飯がべチャべチャになって、いることもなかったし、卵焼きだっておいしく作ってくれた。

「それに、見るよ！」弁当を指さされる。「こいつの弁当って、漬け物が入ってるんだぜ。コンビニ弁当でもないのに」

そいつが指摘したのは、弁当箱のすみに入れた三切れのたくあんだった。

「うわ、まじだ。しかもまずそう」

「前からだぜ、これ。こいつの弁当のぞくたんびに入ってやがんの」
たくあんは、雄一の母親が生前に漬けていたものだった。自家製だからか、既製品のような黄色ではなく、大根の白色がそのまま残っている。

雄一の母親は漬け物づくりが数少ない趣味だったようで、たくあんに限らずいろいろ漬けていて、弁当にもほぼ毎回入っていた。

ただ、雄一はとくに母の漬け物が好きだったわけではない。今日もろくに料理の経験のない雄一では弁当箱を埋めきれず、冷蔵庫にタッパーに入って残されていた漬け物を、深く考えずに入れてきただけだった。

だが、そいつに指さされたたん、マグマのように熱くたぎる感情が腹の底に生まれたのを、雄一ははつきりと感じた。

「そんなにうまいのかよ、これ」

そいつはそう言うと、おもむろにこちらへ手を伸ばし、たくあんをひと切れつかみとった。

口に入れて、噛みくだく。

「うえっ、まずっ」

そして、すぐ吐きだした。

教室のタイル床の上に、たくあんが無惨な姿で飛び散った。

その様子に、教室に薄い笑いが広がる。

「ひでー、食うんじゃなかった」

そいつはなおもぺっぺと唾を吐き出す仕草を見ると、子分が差し出したペットボトルの水で口をゆすいだ。

そして、雄一にむかって汚れた床を指さし、言った。

「おい、おまえ掃除しとけよ。おまえの食い物で汚れたんだからな」
雄一がそいつを見た。

「なんだよ、文句あんのか」

そいつも雄一をにらみかえす。

といつても、雄一はにらんでいるわけではない。無表情で見つめているだけだ。

少しの沈黙のあと、雄一が今日初めて、口を開いた。

「僕、知らなかったよ」

「あ？」

「僕 母さんの漬け物、本当は好きだったんだ」

雄一は箸を机の上に置いた。そして、そのとなりにずっと置かれていたものに手を伸ばした。

モニターの向こうが、俄然騒がしさを増した。

それは、昼休みが始まったときのような無秩序で、のんびりした騒がしさじゃない。全員がひとつの事実、驚きと恐怖をむけているのだ。

雄一が、ナイフを鞘から抜いていた。

「あわー、だ、だめ！だめですよー」

「おいバカ、やめろ、早まるな！」

俺とメイはモニターの前で右往左往したが、そんなことをしても事態の進展には当然ながら何の影響も及ぼさない。

「こ、このままじゃげんぼうとこうかくが確定です。とらちゃん、短い間ですけどお世話になりつてあいた！」

「なにあきらめてんだ！なんとかしろよ！」

メイが突然俺にむかって頭を下げやがったので、髪の毛の分け目を思い切り突っついてやる。

「そんなこと言ったって、何度も言ってるようにここからじゃ起きてる人に干渉する手段はないんですよー」

「起きてるように見えて実は寝てるなんてことはないか？」

「とらちゃん、いくら何でもそれは」

「いいから、調べろ！」

このまま最悪の事態になった場合、メイは減俸と降格ですむかもしれないが、俺はその存在自体を抹消されてしまうのだ。俺は必死でメイをうながした。

メイはモニターの脇に設置されたパネルを操作して、表示された数字を確認する。やはり俺には理解できないが、それを見ればターゲットの心理状態や体調なんかがわかるようになっていっているらしい。

「うーんと、あっ、でもとらちゃんの言うこともあながち間違いでもないみたいです」

「なにっ、どういうことだ？」

「雄一君、今は半覚醒状態に近いですねー。トランス状態というか、イっちゃってる状態というか」

つまり、完全に眠っているわけではもちろんないが、通常の状態でもないということか。

「おい、それなら何とかなるんじゃないか？」

「えー、でも、夢を見ているのはほど遠いですよ？」

どうもメイの食いつきがわるい。あきらめがよすぎるんじゃないか？

「もしかしておまえ……」思い当たってしまった。「一度俺のこと消して、次は黒猫の使い魔を作ろう、とか思ってるんじゃないだろうな」

「うえっ？ち、違いますようー！。さすがにそこまでは思っていないですー」

メイは両手を顔の前でぶんぶん振って否定したが、逆にその仕草が怪しい。

「本当だろうな……」

「本当ですよー」

「だったら、最後まで努力しろ！」

「はぐっ」

俺はメイの眉間のあたりを突っついた。

「み、眉間は人体の急所ですよー」

「ちゃんと手加減しただろ。それより、半分寝てるってことなら、扉を開いて夢の世界から呼びかければ、ひよっとしたら聞こえるんじゃないか？」

メイは一瞬きよんとしたあと、思案顔になった。

「あー、どうかなあ……。やったことはないですけど」

「なら、試す！」

言いよどむメイを叱咤する。俺は翼を腕のように振って夢の世界とつながっている扉を示した。

が、そこでひとつ思い出した。扉の先が誰ともつながっていない場合は、ロックがかかっていて扉は開かないのだ。

「扉が開かない　なんてことはないよな？」それでは、呼びかけようもない。

「安全装置は座標をセットさえしてあれば外れるはずですけどあ、開きますねー」

ノブを引いたメイの聲がにわかに嬉しげなものになる。

「うわ、うわ、すごい霧ですー」

しかしすぐにあわてだした。全く夢を見ていないものの夢の世界は、通常の何倍も濃い霧に覆われていて、十センチ先も見通せない有様だったのだ。

「これは、中に入るのは無理ですねー。一瞬で迷子ですよー」

ばたばたと手を振って霧を払いながらメイが言った。霧は俺たちがいる小部屋の方まで進入しようとしている。確かに、この中に入っていくのは自殺行為だ。

「なら、ここから呼びかけるまでだ。叫べ、腹の底から！」

「ゆ、雄ーくん」

「もっと大きく！」

「ゆーいーちくーん！きこえますかあー！」

広い夢の世界に、メイの聲がこだまとなって響いていく。

「ちよ、ちよつと武市君、やめなよ！」

離れた位置からクラス委員の女子が雄一に訴えている。

「おい誰か、先生呼んでこい！」

男子生徒のひとりがそう言い、別の生徒が何人か連れだって教室を飛び出していった。

周囲は騒然としていたが、雄一はそちらへ視線を向けることもしない。

その目はひたすら、目の前の大男に　母の漬け物を侮辱した男に向けられていた。

そしてその手には、果物ナイフ。

刃渡り十数センチほどのものとはいえ、中学校の教室には十分に不似合いな輝きを放っていた。

「おい、おまえ正気か？」

大男は平然を装ってはいたが、その声はかすかに震えている。

正気かどうかはわからない。だが本気かどうかは、その眼を見ればわかる。

雄一は本気だった。

「スイッチを　押してもよかつたんだ」

独り言のようにつぶやく。

「母さんが死んで、僕にはなにも残っていないんだから。だけど、それでいいのになって　このまま死んだら、ほんとうになにも残さず、ただ生まれてきて、死ぬだけで終わっちゃう。それでいいのになって……」

「な、なに言ってるんだ、こいつ」

雄一の言葉は、周りの人間からすればまるで要領を得ていない。

「目の前にしたら、誘惑に負けて押しちゃうと思ったから　寝ないで、ずっと考えてた。僕にはまだ、できることがあるのかなって」

「やばいよテツさん、こいつ、ちよつとイっちゃってるんじゃない」

「うるせえよ。お、おまえは下がってる」

大男自身にも雄一がまともでないことは伝わってきていたが、ここで簡単に逃げ出すようでは今後の体裁が保てないとの考えから、そこに踏みとどまっていた。

雄一はなおもいつから眼をそらさないまま、誰向けでもない独白を続けている。

「だけどさすがに、もう限界だ。もう耐えられない。僕がいたあかしを　母さんを侮辱したおまえを。母さん、ぼくは大好きだったのに、だから、世界に、傷跡を、なにもしてあげられなかったから」

雄一の言葉は、もはや意味不明の単語の羅列になっていた。その眼は相変わらず相手を見つめているようで、しかし焦点が合ってい

ないようにも見えた。

「母さん。僕の、傷跡を、残してやる」

雄一が右手のナイフを構えなおし、右足を一步踏み出した。相手はその圧力に押されて一步下がり、背後にあつた机に手を置こうとした。

しかし、よほど手に汗をかいていたのだろう、右手が滑り、机のへりをとらえそこねた。大男は大音量を響かせて無様に転び、尻をしたたかに打ちつけた。周囲を囲む生徒たちがどよめく。

雄一が一步、一步と近づいてくる。大男はすぐ背中に机があるから、もう下がることができない。その距離が詰まる。ナイフの届く位置になる。

雄一には表情がなかった。まったくの無表情で、その位置に立っている。

大男はこれまで、殴りあいの喧嘩ならいくつも経験してきた。そんなとき、相手はいつも怒りに頬を紅潮させ、激情を隠さずにむかってきた。彼自身も同様だっただろう。

こんな風に、生命を左右する刃物を手にして、しかしいつさいの表情を持たず、こちらが理解できる感情も見せずにむかってくるものなど見たことはなかった。彼は大男だが、雄一と同じ弱冠十四歳の少年なのだ。

「ま　マジかよ、待てって」

大男は雄一を見上げて言った。隠せない震えが、声を裏がえらせる。

「ちよつとからかったただけだろ？そんな、刃物出されるほどのことじゃないっつーか」

「冗談めかして言っても、雄一の顔面はひくともしない。

「なんだよ、謝ればいいのか？悪かった、ごめんなさい、ほら、これでいいだろ？おい、何とか言えよ！」

雄一はもう独白もなく、大男の訴えにもひと言も発しなかった。代わりに右手と右足をすこし引き、半身の体勢になった。

体重をかけてナイフを突き出す、その予備動作に入ったのだ。

「た、武市い！」

大男が悲鳴をあげる。こんな声がでるのかと周りの生徒が驚くほど、か細く甲高い声だった。

雄一のひざが曲がり、腰が沈む。その動きを止めることができるものは誰もいない。

そのはずだった。しかし。

あとは大男へとその身を投げ出すばかりになっていた雄一が、突然その動きを止めた。

腰を上げ、大男から視線をはずす。しかしナイフは構えたままなので、周囲は相変わらず身動きがとれない。

雄一は虚空にむかって視線を泳がせている。

(……ゆ……いち……)

「声」

そしてつぶやく。

「母さんの声がする」

「おい、動きが止まったぞ！」

その様子をモニターで確認した俺は、歓喜の声を上げた。

「ほ、ほんとですかー？ひい、ひい」

メイも笑顔になったが、さっきからずっと全力で叫び続けていたので、すっかり息が切れている。

「ああ、しかもおまえの声を母親と勘違いしているみたいだ。このまま説得すれば、最悪の事態は回避できる」

「それはよかったですけどー、わたしもう限界です、とらちゃん代わってくださいー」

「バカ、俺の声でどうやって母親のまねをするんだ。おまえがやるんだよ」

「声が枯れちゃいますようー」

メイはまた泣き顔になった。

だが、気づけば扉の向こうをおおいつくしていた霧が、わずかばかり薄くなっていることに俺は気づいた。

「見る、あいつがおまえの声に気がついたせいで、すこし霧が晴れて視界が良くなったぞ。さっきほど大声じゃなくても聞こえるんじゃないか？」

「そ、そうですねー」

まあ、気持ち程度かもしれないが。

「いいからやれ。もたもたしてると気のせいにされちまうぞ」

「うう、わかりましたよう」

メイはしぶしぶといった態度ながらまた扉のむこうへとむきなおり、深呼吸する。

「ゆういちくん、そんなことしちゃダメですよー」

俺はメイを突っついた。

「いたっ、なにするんですかー」

「母親のふりをするんだよ。君づけしてどうする」

なんとかコンタクトをとることはできたが、はたしてこいつに説得なんかできるのだろうか？

「母さんの……？」

頭の片隅に直接ひびくようなその声の主をさがして、雄一は視線をさまよわせた。

しかし当然ながら母の姿をその眼に認めることはできない。

しばらく耳を澄ませて、やはり空耳かと思い直そうとしたとき、また聞こえてきた。

（ゆういちく……ことしちゃダメ……よ……）

「母さん！」

さきほどよりもはっきりと声が聞こえ、雄一は周囲の状況も忘れて叫んだ。

（おかあさん……悲し……）

声はかすかに、しかし確実に聞こえてくる。その声に集中するあ

まり、雄一の右手がだらりと下がった。

「よし、今だ！」

その隙をついて、生徒に呼ばれて駆けつけていた男性教師がふたり飛び出し、雄一へととりついた。ひとりが雄一の右手からナイフをもぎ取り、もうひとりが抵抗しないように身体を押しさえつける。

しかし、予想に反して雄一は全く抵抗せず、教師は勢いあまって雄一を押し倒してしまった。

「す、すまん武市、大丈夫か？」

教室の張りつめた空気がゆるむ中、教師が雄一を引き起こそうとする。

「おい、武市　？」

しかし、そのときにはもう、雄一は目を閉じて安らかな寝息をたてていた。

モニターの中の雄一が意識を失うのと同時に、扉の先を隠していた霧が一気に後退し、中の様子が見渡せるようになった。

「よし、よくやったぞ、メイ」

実際、説得らしい説得をしたわけでもなかったが、とにかく雄一がメイの声を聞いて思いとどまったのは事実だ。

「あー、のど痛い……」

メイは舌を出し、のどを押さえてうめいていた。

「当面の危機は去ったな。これからどうする？」

「もちろん、説得しにいかない……ん、ん、ごほん」

なんだか咳払いをしてのどを整えると、メイはようやく元の調子に戻った。

「まだ運命の悪い流れがどうなったかわかりませんが、放ってはおけないですー。目が覚めたと勝手に暴れ出すかもしれないですし」

「それもそうか」

とにかく、眠っている今しかチャンスはない。

俺とメイは互いにうなずきあうと、扉を抜け雄一の夢の世界へと

降り立った。

(5) (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

あ、あれ……どんどん長くなる、なんで？

2日前には書きあがっているはずだったんですが、まだ終わっていません。

一応、次で終わりの予定ですが……。あした書き終わるかな。

ご意見、ご感想などありましたらぜひお聞かせください。

霧に囲まれた世界で、雄一の姿はすぐに見つけることができた。先日ここで初めて会ったときは小さくなって座り込んでいたが、今日はせわしなく首を動かして辺りを見回しながら歩き回っている。母親の姿をさがしているのだろうか。

完全に落ち着いているようには見え、さきほどモニター越しに見た「イッチャツてる状態」を思い出してしまふ。

「対応を間違えたら、俺たちに襲いかかってきたりしてな……」

「こ、こわいこと言わないでくださいよう」

メイはおっかなびっくりながらも、歩みは止めずに雄一へと近づいていった。

が、こちらから声をかける前に雄一と目が合ってしまった、思わず立ちすくんでしまふ。(ついでに言うと、そのときおもいきり肩をすくめたので、そこに乗っかっていた俺は滑り落ちそうになった)

「あなたたちは……」

雄一が先に口を開いた。その口振りは思ったよりまともだ。

「あ、えーとお」「メイはあからさまにおるおるしている。

そしてなにを思ったのかこう口走った。

「お、お母さんですよー？」

「……」

「……」

「……」

刻が止まった。

「おまえ なに言ってんだ？」

「えっ？だ、だって、母親のふりしろって言ったのとらちゃんじゃないですかー」

「バカ、そりゃさっきの話だろうが っ、しまった」

メイのバカにつられて俺まで失態。

さっきのは母親の声なんかじゃないと、こつちからばらしてしま
った。

「やっぱり さっきのは、あなたたちの声だったんですね」

「はい、そうです あつても、決して雄一君をだまそうとかそう
いうんじゃない」

あわてて弁解しようとするメイ。だが、雄一はそう聞いて怒るわ
けでも、俺たちを問いつめるわけでもない。心配していたよりも、
ずっと落ち着いているようだ。

「いいんですよ。それに、僕もうすうす気づいていましたから。母
さんの声にしては、きれいすぎるなって」

「えっ、きれい ですかー？」

普段言われなれないことを言われて驚いたのか、メイはおたおた
を止めて聞き返した。

「はい。母さんの声は、もつとかすれてて、聞き取りにくいくせに
よく通るっていうか そんな声でしたから」

雄一は言いながら、つかの間目を閉じた。頭の奥に残っている母
の声を思い出したのだろうか。

「どうして、僕を呼んだんですか？」

やがて目を開いた雄一が問う。

「もちろん、止めるためですよ」メイが答える。「あのままじゃ、
大惨事になるところでしたよ？間に合つて良かったですよー」

「確かに、殺す気でした」雄一はさも当然、とばかりにそう言った。
「あいつはもちろん、僕を笑いものにした連中をできるだけ多く殺
して、最後は自分も死のうと思っていました」

「やけになるのは良くない」俺はできるだけ優しい口調でその声を
かける。「そんなことしたつて、何の意味もない。凶悪犯罪者とし
て名前が残るだけだろうが」

雄一は俺を見ると、かすかに嘲るたがような笑みを浮かべた。これま
で見せなかつたたくいの表情に、背筋が寒くなるのを感じた。

「やけになんてなつていません。むしろ母さんが死んでから、ずつ

と考えていたことなんです。あなたたちに未来を教えられて、僕は立ち向かっていこうと思っていた。でもそれを支えてくれるはずだった母さんがいなくなつて、それでもそうやっていけるだろうか。ずつと考えて そんなの無理だし、意味もないことだと思いました」

雄一の言葉遣いはしつかりしている。顔つきもまともだ。だが、口にする内容はあまりにも痛々しい。

「今度眠ったら、たぶんまたあなたたちが来て、スイッチを押すように言うと思いました。そしたら、僕は押したでしょう。でも、そんな風にして死んだら 僕はなんでこの世に生まれしてきたんでしょうか。たった十四年だけ生きて、なにも残さずに死ぬ。何年かしたら、僕をいじめていた連中だつて、すっかり僕のことなんか忘れてしまう」

雄一の頬に、すこしずつ赤みが増している。しゃべっているうちに、また興奮してきているのだ。

だが、俺は口を挟めない。生前の記憶を持たず、つい先日生まれただばかりの俺では、こいつの思いのたけをさえぎつてまで口にする言葉など思い浮かばない。

「そんなの許せないって思った。僕が生きてきた証を、何か残して死にたいと思った。でも、僕にはなにもない。 ならいつそ、傷跡だつていい」

俺がこいつの周りにいる大人のひとりだつたなら、なんと云つただろう。こいつの世界の狭さを諭しただろうか。そんなふうに思い詰めなくとも、これからおまえにはいろんなことがあつて、その中でおまえもいろんなことを残すことができると、希望を持つと言つただろうか。

だが、俺はこいつの未来が輝きに包まれていないことを知っている。希望は薄く、絶望はより濃くなつていくことを知っている。

本来なら、そうした運命に陥つてしまったものを絶望から救済し、安らかな死を与えてやる それが俺たちの仕事だ。

ここまでこいつを追いつめてしまったのは、ひとえに俺たちの力のいたらなさというほかはない。

「でも、ひとごろしは、いけないことです……」

小さな声で、メイがそう言った。

「それは、生きてる人の考え方だ。僕はもう死ぬんだから、関係ない。それに、あなたたちは死神なんだろ？ 死人がいつぱいでたほうがいいんじゃないの？」

雄一は過敏に反応し、そう言い募った。かなり興奮して、口調も変わってきている。

「それは、違います、誤解です！。本来死ぬはずじゃない人を殺すのは、世界の運命の流れに影響を与える行為なので、厳しく制限されているんです。私たちは、雄一君のように特殊な運命の流れから抜け出せなくなった人たちに限って死神としてのお仕事をしているんです。無差別に人を殺すのは大罪です。大目玉です。地獄行きなんですー」

「地獄だつてどこだつて、連れていけばいい。死んだ後のことなんて、どうでもいい」

雄一はそう言い放った。「どうせ、どこにいたつて、僕がひとりなのには変わらないんだから」

「それは、違います！」

メイが叫んだ。

正確には、強い口調で言った、という程度の声ではあったが、いつも間延びした口調でしかはなさないこいつがこんなにはつきりとした声を出すとは思っていなかったの、俺は驚いた。

雄一もやや面食らったのか、一瞬素の表情に戻ったようだったが、だがすぐにまた興奮が戻ってきて、顔つきを厳しくする。

「なにが違うのさ？」

鋭い目つきでそう言われて、メイはまたいつものようにおどおどしはじめた。

おい、しっかりしろ。ここが正念場だぞ。

「ゆ、雄一君は、ひとりじゃないです。お母さんがいます」

「母さんは、もう死んじゃったじゃないか！」

雄一が怒声をあげる。母親のことに触れるのがもつともデリケートなことであるのは当然だ。

だが、メイは怯まなかった。肩がふるえてはいたが。

「確かに、お母さんは亡くなりましたけど……。お母さんの魂は、今ちよつと困ったことになっているんですー」

「困った、こと？」

「はいー。お母さん、天国に行けないかもしれません」

「どういうことさ。母さんは悪いことなんかにもしてない！」

雄一は強く抗議した。

「たしかにそうなんですけどー、お母さん、やっぱり雄一君のことがすごく気になってるようで、ほとんど未練になっているんですー。その状態だと、死者の世界、えーつと天国とか地獄とか、輪廻転生とかそういうもろもろのある場所なんですけど、そこへ入るための審査を受けさせてもらえないんですー。今は魂の状態で、死者の世界の入り口に留めおかれてる状態なんですよう」

「僕のことか」

「このままだと、最悪の場合は門前払いされて、生者の世界で悪霊になっちゃういます」

雄一は下を向いた。

「生きている間、僕のせいで苦勞していたんだから、忘れてしまえばいいんだ。それで、天国に行ってくれればいいのに……」

「そんなわけにいくか」

俺の口から、自然と言葉が出た。

「父親の生命保険も使わずに、過勞死するほど必死になって働いてたんだろ？」

「だから、僕のせいだろ？死んでしまったんだから、もう母さんも自由になればいいんだ」

やれやれ、と俺は首を振った。俺にはこいつの母親の気持ちが分

かる。ひよつとしたら、俺もかつては人の親だったのかもな。

「逆だよ、坊主。おまえのおふくろはおまえのために生きていたんだ。仕方なしにじゃないぜ。おまえの成長の手助けをしてやることこそが、彼女の生き甲斐だったんだ」

でなければ、使える金を取っておいてまで、過酷な労働をするはずはない。

「なのに、この時期に死んじまった。これから高校や大学の受験があつて、就職活動があつて　いちばんおまえが大変な時期なのに。おふくろさんはおまえを支えてやりたかったのに、それが出来なくなつたんだ。悔しいはずだし、未練にもなるだろ」

「死んでしまつたからといって、それですぐすべてがなくなる訳じゃないんですー」

メイが引き継いだ。

「生者の世界と死者の世界は、別の世界だと思われがちですけど、実際はつながっているんですー。ただ、自由に行き来はできませんけど。容れ物が変わるだけで、魂は共通です。生者の世界での記憶や自我は、死者の世界ではぼやけてしましますし、生まれ変わったらきれいさっぱりなくなっちゃいますけど、魂そのものは変わらななんですよ？」

メイの説明する内容を、一度聞いただけで理解することは難しいだろう。生者の世界にいるものなら、なおさらだ。

だが雄一は神妙な顔で話を聞いていた。

「魂は、つながっているんですー。すこしでも関わった人とは目に見えない糸で結ばれて、それは死んでも、生まれ変わっても、魂そのものが消滅しない限り、ずっとつながっているんですー。もちろんそのつながりは身近な人ほど強くつなぐって、雄一君と雄一君のお母さんの魂は、今でもしっかりと強く結びついていますー。そして、互いに影響を与え合っているんですよう」

「影響を　　つてことは、もし、あそこで僕があいつを殺していたら、どうなっていたの？」

「きつとお母さんは、ひどく絶望したと思いますー……。そういうことがあると、魂自体に傷が付いて、消滅してしまうこともあるんです。そこまでいなくても、そういうのは『いい魂』ではないとされるので、えーと、いい扱いは受けないと思います……」

メイは言葉を濁した。実際、俺たちは死者の世界のことをすべて知っているわけではない。

俺の知っている限りでは、深い傷がある魂は転生させられることなく、消滅するまでどこかに閉じこめられるという話だ。肉体と違い、魂の傷はなかなか回復しない。

「そんな……」

雄一は、その場に座り込んでしまった。自暴自棄になったあげく、最愛の母を死んでなお傷つけようとしていたことを知ったのだから、無理もない。

「それじゃ僕は、どうしたらいいの？お母さんが天国に行くためには――」

「ひとつはですね――」

メイはスカートのポケットを探り、例のスイッチを取り出した。

雄一の目が吸い込まれるようにしてそちらへ向けられる。

「これをぼちつと押して、お母さんのところに行くことです。今ならお母さんは死者の世界の入り口で足止めされているので、追いつけますねー。ただ、審査は一緒に受けられますけど、そのあと一緒にいられるかはわかりません。生者の世界で家族だった、とかを考慮してもらった例ってあまり聞かないので――」

「それに、おまえが死んじまえば確かにおふくろさんの未練はなくなるだろうが、それなりにショックは受けるだろうな」

俺が付け加えると、雄一は唇を噛んだ。

「もうひとつは、スイッチを押さずに、人殺しもせず、がんばっていき続けることです。雄一君がちゃんとひとり立ちできそうだなってというのが分かれれば、お母さんもそのうち安心して、審査を受けられるようになると思いますー」

「僕は……」

雄一は言いよんでいる。それは無理もないことだと思う。母親のことを最優先に考えるなら、このまま生きていくことがいちばんいい、ということになる。だが、それはこいつにとって過酷な道だ。

できるだけ全部が丸くおさまる方法はないだろうか。俺は首をひねって考えた。

「母親が死者の世界に行ってからもう一度会って、そのときにスイッチを押したらいいんじゃないか？」

それなら、母親のショックも抑えられるのではないだろうか。

「あ、それいいですねー」

メイも同調した。

「でも、たぶん一ヶ月くらいはがんばって生きてもらわないといけないですけどー」

「それくらいなら何とかなるだろ、なあ、ぼつず？」

「はい、あの……」

雄一が何かを言いかけた。

そのとき、なにもない霧の空間に、唐突に腹に響くおどろおどろしい音楽が鳴り響いた。

「う、うわっ」

「なんだ、突然？」

俺と雄一は驚いて辺りを見回したが、メイは平然としてポケットに手をつっ込んだ。

「あ、電話ですー」

そして携帯電話を取り出した。

「着メロかよー！」

「死神っぽくて、かつこいかなー、って」

「おまえのセンスってどうかと思うぜ……」

「えー、ダメですか？あつ、ちょっと失礼しますねー」

メイは雄一にひとこと断ると、折り畳み式の携帯を開いて耳に当

てた。

「もしもしー、メイちゃんですよー。あっ、課長」

「どうやら電話の相手は俺たちの上司のようだ。」

「はい、今対応中ですー。えっ？あー、はいー。えっ、そうなんですか？」

「どうやら雄一に関する事なのだろうが、メイはたびたび驚いている。なにがあったのだろうか。」

「気にはなるが、電話の向こうの声は俺の耳まで届いてこない。」

「しかし、こうして会話の片一方だけを聞かされるのってなんだかイラっとするな。」

「はい、わかりましたー。それじゃ、しつれーしますですー」

「メイは数分にわたってやりとりを続けたあと、電話の向こうの相手にむかって深々とお辞儀をした。携帯を耳からはずし、ぱたんと閉じる。」

「はー、びっくりです」

「どうした？」

「メイは俺の問いには答えず、雄一の方へと向き直った。」

「あ、雄一君、おめでとございますー」

「そして、ぺこりと頭を下げた。」

「当然、雄一は事情を理解できずにぼかんとしている。」

「えっとですね、今連絡があつて、雄一君の運勢がほんのちよつとだけ良くなつたらしいんです」

「え？」

「メイの言葉に雄一は首をかしげる。俺も驚いてメイを見た。」

「どういうことだ？変わりようもないほど悪い流れだから、ターゲツトになつたんだろ？」

「そうなんですけどー、どうも普通はありえない想定外の介入があつたらしくて、その拍子に運よくぼいって抜けたらしいんですよ」

「ぼいって？」

「はい、ぼいって」

こいつの表現はよくわからない。

が、とにかく大事なのは、こいつの最悪な対人運が改善されたってことだ。

「じゃあ、とにかくこいつは、これから普通の人付き合いができるってことか？」

「いきなり、そこまで良くはならないですよ。これまで最悪だったのが、最悪というほどでもなくなった、って程度ですよ。いままではどれだけ知り合いを増やしてもお友達になれる可能性はほぼゼロでしたけど、それが百人知り合えばひとりくらいはメルアド教えてもらえるかも、ってくらいになっただけですよー」

「それ……良くなったのか？」ほとんど誤差じゃなかるうか。

「全然違いますよー！。可能性はあるんですから。それに、これからは自分の努力ですこしずつ運勢を良くしていけるんですよ？いままでは最悪すぎて、努力じゃどーにもならなかったですけど」

「ふむ……だ、そうだ。ぼうず。理解できたか？」

雄一は俺にふられると、幾度かまばたきをした。

「あ、はい。なんとか」

「いちど悪い流れに乗っちゃった人がそこから出てくるのって、すつごく珍しいことなんですー。雄一君はラッキーですねー」

メイは本気でそう思っているのか、いつもの脳天気な笑顔を雄一にむけた。

「で、ここからが大事なんですけどー。これで雄一君はわたしたちが魂を回収する条件からはずれちゃったんです。さっきの電話の要件はそれで、雄一君は今日の十四時をもって、わたしたちのターゲットじゃなくなります」

「がんばって生きるしかないってことか。さっきのやりとりは無駄になったな」

「はいー。でもですね、えっと……」

メイは手に持ったままだった携帯電話をちらりと見た。

「いま、十三時五十五分です。なので、あと五分間だけ、雄一君は

権利がありますー」

そう言つと、携帯をポケットにしまいこみ、代わりにまた例の物を取り出した。

「いまなら、このやすらかに死ねちゃうスイッチを押して、お母さんのところに行くことも可能ですー。十四時をすぎると、もうこのスイッチを押しても意味なしです」

メイは歩み寄ると、雄一が手を伸ばせばすぐにスイッチが押せる位置に立った。

「スイッチ、押しますか？」

雄一は無言のまま視線を落とし、光沢のある赤いボタンを見つめた。

だが、それは数秒のことだった。雄一はすぐに顔を上げる。

そして、首を振った。

意外にも、ほとんど悩む様子はなかった。

「いいんですか？」

「はい」

問いかけに、今度ははつきりと口に出して答える。

「まだあと三分くらいは、悩んでいても大丈夫ですよ？」

「決めましたから」

あまりにもあっさりしているので、俺も少し不安になる。こいつ、ちゃんと理解してないんじゃないのか？

「運勢が良くなつたって言つても、ほんのちよつとだぞ？それに、すぐに何かが変わる訳じゃない。目が覚めたら、おまえはまた当分、ひとりぼっちだぞ」

今日までのことで、こいつは十分うちのめされてきた。このまま生者の世界に戻つても、また多くの苦勞を背負うことになる。

そこまでする必要があるだろうか。こいつが母親の近くに行きたいと願つても、何の不思議もないように俺には思えた。

だが、雄一はこう言った。

「ひとりぼっちじゃ、ないです」

「？」

「さつき、教えてくれたじゃないですか。魂はつながっているんだって。母さんと僕は、母さんが死んでしまっても、離れてしまったわけじゃないんだって」

雄一はまるで悟りを開いたような、すがすがしい笑顔を俺にむけた。

「それさえわかっていれば、大丈夫です。どんなに他人に嫌われたって、やっていけます。母さんが安心して眠れるような人間に、なっつて見せます」

「ぼつず……おまえ、大した奴だな」

「えへへ」

照れたように笑うその様子は、歳相応の少年のものだ。

だがもうこいつは、同年代の誰よりも あおいじめ野郎なんかは比較にもならないほどに、大人になったのだ。

「本当に、いいんですね？もうこれ、しまっちやいますよ？」

メイが最後の確認をする。

「はい、ありがとうございます、メイさん」

雄一ははつきりとした言葉で、そう礼を言った。

多分こいつは、大丈夫だろう。これからもいろいろ不運はあるだろうが、この数日で経験したことを糧にして、乗り越えていくに違いない。

そしていつかは、自力で運命の流れを乗り切って、幸せだっつつかむだろう。

それだけの力のある声だった。こいつに友人ができないなんて、俺にはそのほうが信じられない。

「はうー、疲れましたー」

俺たちは雄一と別れ、あの小部屋へと戻ってきた。

今度ばかりはメイだけではなく、俺も全身で倦怠感を感じている。

このまま、ねぐらへかえって眠ってしまいたい気分だが。

「はあー、もどって報告書をまとめない」とー

仕事が終わったなら、すぐに報告をあげなければいけない。メイはうんざりした表情でそう言った。

「俺、先に帰っていいか？」

「むっ、とらちゃんずるい！わたしに押しつける気ですかー？」

「押しつけるもなにも、報告書はおまえの仕事だろうが」

「それでもー、最後まで一緒にいるのが相棒ですよー」

「相棒ねえ……」

俺からすれば、保護者の感覚なのだが。

「それに、多分課長からおこごごがあるんで、そろってないとまずいと思いますよ？」

「お小言？」

「だって、雄一君の魂が回収できなかったので、今週はノルマ未達成ですからー」

「あっ！そうか……」

そもそも俺たちの仕事はそこが本分だ。

雄一の魂を回収しなかったのは上からの指示でもあるが、それはノルマが減ることを意味していない。

もともと今回の仕事は、雄一と雄一の母親、ふたり分の魂を回収することが前提だったのだ。

「それにですねー」

「まだあるのか？」

「多分ですけど、雄一君の運勢が変わったのって、わたしたちのせいなんですようー」

「へっ？」

たしか、あのとときのメイの説明では「想定外の介入」があったということだったと思うが。

「雄一君が刃物を抜いたとき、眠ってなかったのに扉を開いて呼びましたよね？あれ、実は重大な規約違反というか、やってはいけないことなんですー。マニュアルにも書いてありますよ？」

「えっ！そ、そうだったのか？」

俺はマニュアルの項目を思い出そうとしたが、まだすべてが頭に入っているわけではなく、うまくいかなかった。そもそも、あのときは必死で、そこまで考えを及ばせる余裕なんかなかったのだ。

だが俺と違ってメイは昨日今日死神になったわけではない。マニュアルの内容はしつかり頭に入っている。

「ん、てことは、あのときもおまえはわかってたんだよね？どうしてそう言わなかったんだ？」

俺は率直な疑問を口に出した。

「だって、とらちゃん必死でしたからー。わたしだって、とらちゃんがいなくなっちゃうのはイヤでしたもん」

「メイ……」

こいつ、なんだかんだと言いながら、俺のことを助けてくれたのか。

「その結果として雄一君が起こすはずだった犯罪が起こらなくなっ
て、それで運命の流れが変わっちゃったみたいなんですようー」

つまり、俺たちがマニュアルで禁止されている行動をとったことが、「想定外の介入」だったというわけか。

「悪い犯罪が起こらなかったのはいいことなんですけど、でも違反は違反なので、もどいたら課長にすごい怒られると思いますー」

「そういうことなら仕方ないな」俺は少しばかり、胸が熱く感じているのを隠して言った。「一緒に怒られてやるよ」

「電話で前代未聞だって言われたので、下手するところかくくくらいはあるかもですねー」

「そうか　って、降格？」

「はい、こっかくです」

「そしたら、俺は？」

「しょうめつです」

「なんだそりゃー！」

どちらにしても消滅の危機なのかよ！

「無差別殺人事件を引き起こすよりは軽くて済むとは思ってますけど、こればかりは聞いてみないことにはわかんないですねえ。もしそうだったら、まあ残念でしたってことですー」

「残念でしたですむか!」

「魂の消滅ですから、念も残りませんけどねー。ってちょっとらちゃん、肩の上で暴れないでくださいようー」

「うるせえ、もし降格になったら、おまえの髪の毛全部むしってやるからな!」

「ええっ、スキンヘッドの美少女死神なんて、斬新すぎますようー」
俺は小部屋のなかで暴れ回る。

俺、がんばっただろ?初仕事だっていうのに、メイを引っ張ったり引っ張り回されたりしながら努力して、なんとかうまくまとめたはずだ。

メイにしたって、バカなりにがんばっているところもあって、これならまあ一緒にやっていけそうだと思いかけていたのに。

これで終わりだとしたら、そんなのはあんまりだ。

雄一より、俺のほうがよっぽど不幸じゃないか。

「ほらとらちゃん、行きますよー」

「くそーっ、消滅なんて、認められるかーっ!」

俺の叫びは、広く静謐なイモータル・スペースに、むなしく響きわたるのだった。

エピソード

あれから二日後。

久しぶりの休日となったメイは、俺を連れて中央通りに買い物にやってきた。

メイはまっさきに一件の小物屋にはいると、ヘンなデザインのプローチやら、小物入れやらをきゃーきゃーいいながら眺め、手に取っていく。

俺もしばらくは付き合っていたのだが、一向に終わりを迎えない女の買い物に耐えられなくなり、一足先に店を後にしていた。

ベンチの背もたれ部分にとまって待っているのだが、メイはなかなか出てこない。こんなことなら家で待ってりゃ良かった。

「あつ、とらちゃん。お待たせしましたー」

小一時間ほど経って、ようやくメイが店から出てきた。入るときには持っていないかった小さな袋を手に提げている。

「それだけ買うのに、なんでこんなに時間がかかるんだよ」

「わたしに無限の財産があれば、ここからここまでーって買って買ってもいいんですけどー、爪に灯をともし生活ではそうはいかないのですようー」

メイは口をとがらせてそう言うと、ベンチに腰掛けた。今日は仕事ではないので、いつものゴスロリ仕様のドレスは身につけておらず、普通の格好だ。ただし、ツインテールはそのままだが。

「とらちゃん、まだちょっと不機嫌ですねー。こうかくにならなかつたんだから、もういいじゃないですかー」

あの後、メイの言っていたとおり、俺たちは課長にこっぴどく叱られたが、幸いにして処分は受けずに済んだ。結果的に無差別殺人を回避できたことが、一応評価されたとのことだった。

とはいえ、まったくのお咎めなしともいかず、メイはいつもの倍以上の報告書を書かされたし、俺は俺で分厚いマニュアルをいちか

ら読み直す羽目になった。そのあとには確認テストまで受けさせられた。

それで、昨日は一日つぶれてしまったのだ。

「いま不機嫌なのは、そのせいじゃないけどな」

俺はベンチの背もたれから定位置のメイの肩へと飛び移ろうとする。

「あ、ちょっと待ってください。そのまま、そのまま」

メイは袋を探りながら俺を制止し、顔を近づけてきた。ツインテールが揺れて、片方が俺のくちばしにかすかに当たった。

「じつとしてくださいー」

「？」

メイは袋からなにやら取り出すと、俺の首もとで「そこそやって

いる。やがて、首もとにかすかな圧迫感を感じた。メイが俺の首に何かを巻いたのだ。

「できましたー。とらちゃん、苦しくないですか？」

「ああ……」

確かに、苦しくはない。

「あ、似合ってますようー。とらちゃん、かわいいですー」

メイは離れた位置から俺を見て、手をたたいて喜んでいる。

「おい、なにをしたんだ」

「えへへー、プレゼントです」

メイははにかむようにしてそう言った。それはいいのだが。

「俺にはどうなってるか、全く見えないんだが」

身体の構造的に、俺は自分の首もとを自分じゃ確認できないし、手で触ってみることもできない。

さつき小物屋でみていた限り、こいつの趣味は俺とは合わない。

いったい、どんなものをつけられたのか気が気じゃなかった。

「あ、そうですねえ」

メイは言われて初めて気がついたような反応をすると、また袋を

探った。

そして、小さな手鏡を取り出した。取っ手にドクロのワンポイント付きだ。これを「かわいい」と平気で言うあたり、俺には理解できない。

「はい、どうぞー」

こちらにむけられた手鏡を、おそろおそろのぞきこむ。

俺の首もとに巻かれていたのは、蝶結びにされたシンプルな純白のリボンだった。

「えへへー、とらちゃんの初仕事おつかれさま記念ですよ。どうですかー？」

「ん、意外と……」悪くない。

「とらちゃんがまっくろなので、やっぱり白がいちばん合うかなあって。ほかに、赤と水色のストライプとか、ドクロぼつやのプリントとかもあって迷ったんですけどー」

「なんだよ、ドクロぼつやって……」

「この世界の女の子に人気なグロかわ系のキャラクターですー。なんだったら、交換しましょうか？あれも似合うと思うんですよ」

「断固拒否する」

俺はこれ以上メイの気が変わらないうちに、メイの肩へと飛び移った。

「わつとと」

「これで十分だ。ありがとうな」

「えへへー、どういたしましてですよー」

俺が礼を言うと、メイは笑顔になった。

こいつはバカだし、決して美少女なんかじゃないが、笑顔はまあ、悪くない。

「じゃあ行きましょうか。おなかも空いたし、お昼ご飯ですねー」

「そうだな」

メイは立ち上がり、通りを歩きはじめる。

「わたしは久しぶりにお肉の気分ですー。とらちゃんは、カラスウ

リとカラスムギ、どっちがいいですか？」

「なんでその二択なんだよ……」

俺はメイの肩の上で、すっかりなれた調子でツツコミを入れる。明日から、またターゲットの魂を回収するため、仕事の日々だ。

こいつがどんなにバカだろうと、俺には選択権はない。こいつと一緒に、これからもやっていくほかはないのだ。

だがまあ、何とかなるだろう。

休日の昼下がりが醸す暖かさのせいか、それとも首もとのかすかなむずがゆさのせいか。俺は至極楽観的に、そう考えるのだった。

終わり

エピローグ（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

長くなりすぎました……。当初予定のほぼ2倍の分量に。

あまりの長さにエピローグを別に分けるはめになってしまいました。前回同様、軽く読めるものを、というつもりだったんですが、ちょっとテーマが重すぎましたかね。

読んでいただいた方にすこしでも楽しんでいただけたならいいのですが……。

よろしければ、ぜひご感想をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0998x/>

死ねちゃうスイッチ2

2011年10月3日12時47分発行